

正安本「義孝集」翻刻と校異

今井，源衛
九州大学助教授

<https://doi.org/10.15017/12361>

出版情報：語文研究. 6/7, pp.91-115, 1957-12-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

正安本「義孝集」翻刻と校異

今井源衛

凡例

底本には宮内省書陵部蔵、「義孝朝臣集」、正安元年（一二九九）書写本を用いた。架函番号一五〇・五七

六

二 校異に用いた諸本の略号は左の通り。

「九」九州大学細川文庫本「藤原義孝集」、伝覚源筆室町末期書写か。

「甲」宮内省書陵部蔵「義孝集」一本、外題「元天皇宸筆」と伝える。江戸初期書写本。架函番号五〇

一・二七三

「乙」同じく書陵部蔵「義孝集」一本、外題「甲」と同筆。江戸初期書写本。架函番号一五〇・五七

五

「類」群書類従所収「義孝集」

「彰」水戸彰考館蔵小山田与清旧蔵本「藤原義孝集」

三 底本の書入はそのまま八ポ活字を以て記し、底本以

外の諸本の書入は欄外校異に掲げ、校異が掲出語句全体にわたる場合はそのまま、一部分の場合は右側に傍点を施してその部分を明示することとした。

「九イ」「甲イ」などは、それぞれ九大本校合書入、書陵部甲本校合書入などの意である。

四 底本本本はできるかぎり原本どおりとし、反復記号、仮名づかいもそのままとした。ミセケチにはその左側に、を付け、右側に本文と同じ太きさの活字で訂正した文字を記した。

例。やまふむききの↓やまふししの

五 校異では、漢字と仮名の相違にかぎり、たとえば「給」と「たまふ」、「人」と「ひと」のごとき一般的なものは省略した。しかし「郭公」と「時鳥」「扇」と「あふき」のごときや、特殊なものは記した。

六 和歌に付した番号は群書類従本の配列順を示してい

る。

七 末尾に、底本に見えぬ和歌で他の諸本に存在するものを掲げ、さらに諸本による和歌配列表を付した。
なお諸本の解説や義孝集の性格に就いては、稿を改めて述べることにする。

義孝朝臣集——藤原義孝集九彰。義孝集甲乙類。

源すり——源修理九類彰。これたゝのすり、乙。いきたるに——いきてあるに九類彰。

枕を——まくら九類。

かへすとてつゝみたるかみに——つゝみかみに九類彰。返かみに乙。

返——返し九乙かへし類彰。

かりならずして——かりならずとて九類彰。

さためなりなん——さためたりとか九乙彰。さためなかなん甲。定めたりとは類。

おほゆれと——おほえしかは九類乙。

かくなんありしと——人にかくなんありし九類彰。人にかうなんありし乙。

これかへしせよと——これか返事せよと類彰。返事せよと九返事せよと乙。

いひしかは——いひわたりしかわ乙

かしらはいかにとて——ナシ乙。かゝらはいかにとて甲。かくはいたゝとて九類彰。

ゆふくれに——ゆふくれ九類彰。

義孝朝臣集

源すりのかみの家にてかたかへにいたるに枕をい

拾 たしたるかへすとてつゝみかみに

(1) づらからは人にかたらむしきたへのまくらかはしてひとよねにきと

返

(2) あちきなやたひのやとりをくき枕かりならずしてさためなりなん

あかすおほゆれとかくなんありしとこれかへしせよと

いひしかはかしらはいかにとて

(3) かたるともたかなはたゝしななゝらぬ」一才こゝろのほとや人にしられん

秋のゆふくれに

(4) あきは猶ゆふまくれこそたゝならねおきのうはかせはき

のした露

又

(5) つゆくたるほしあひの空をなかめつゝいかてことしのあきをすくさむ

大殿のなやませたまひしころいかゝと人のいひたりしに*

(6) ゆふくれの木しけきやまをなかめつゝこのほとゝもにおつるなみたかな

うせたまひて御いみはてゝみな^レウ人^レたちわがるゝに*

(7) 今はとてとひわかるめり村とりのふるすにひとりなかもへきかな

すりのかみこれたかゝ返し

(8) はねならふとりともなりて契ともきみわすれはわれもすれし

はるかしらけつらせて人^レよめといひしかは

猶——なを九類彰。

又——ナシ九乙類。

くたる——むすふ九イ彰イ。くたす乙。

すくさむ——くらさむ九乙、くらさん彰。

大殿のなやませ——殿やみ九乙類彰。

人のいひたりしに——人のとひたるに九類彰。とひたりし人に乙。

*天禄三年の秋女のかりやる九イ彰イ。

ゆふくれの——ゆふまくれ九イ。

やまを——庭を甲乙九類彰。

おつるなみたかな——ふるなみたかな九イ彰イ。おつるなみたかな

甲乙類彰。

うせたまひて——うせさせ給にし九類彰。うせ給てのち乙。

御いみ——いみ乙。

みな人^レたちわかるゝに——人^レにおはしわかるゝひ九類彰。

人^レ行わかるゝひ乙

*とのゝ中將のもとへ九イ彰イ

わかるめり——わかるめる九乙類彰

ひとりなかも——すくす乙

すりのかみこれたかゝ返し——修理かみ返し九類彰。すりのかみ

これたゝ返し甲九イ

とりともなりて——とりとなりては九類彰乙。

契とも——ちきるとも九甲類。わたるとも乙。わかるとも九イ彰イ

われもわすれし——うれしとおもふ九類彰。かれしとおもふ乙

はるかしらけつらせて人^レよめといひしかは——春人のよめとい

ひしに九類彰春人のよめといふに乙。

思ひつゝ——なけきつゝ九類。歎きつゝ彰。おもふには九イ彰イ
ことをみるかな——ものをふかな九。ものおもふ哉類彰。ものを
こそおもへ乙。

梅のいとおもしろきをみて——春かしらけつらせてみな人ノよめ
といひしにむめのはなおもしろくあるところを九類彰。とのかくれ
給てのあくるとしの春御前のこうはい九イ彰イ。むめのはなおもし
ろし乙。

*のほかもかにゝほひつゝとあり甲イ。
心ほそけれ——うしろめたけれ九類彰。

又——ナシ九乙類彰。

春の野の——はる／＼の九類彰。はる／＼と乙。

花をあたにと——花をあたに乙。

むかしの人のゆめこゝちする——いまはむかしのゆめこゝちなる
乙。

かへりて——かへりてつとめて九類彰。

おもひけるかな——おもほゆるかな九類イ。おもひゆるかな乙九
イ。おもひける哉彰。

めに——女乙九類

こと人——人に乙。こと人に九類彰

おほかたにはありとみけれともいのはねはなとかへるやまと——お
ほかたに物もいのはねはなにとか人返山よと乙。おほかたつねにみ
れともいのはねはなとかへるやまと九類彰。

(9) 夢ならて夢なることを思ひつゝはるのはかなきことをみ
るかな

梅のいとおもしろきをみて

(10) 春風のそらなるほとはむめの花」2才こそすゑこそ猶心ほ
そけれ

又

(11) 春の野の花をあたにとみし物をむかしの人のゆめこゝち
する

人のもとよりかへりて

(12) 君かためおしからさりしいのちさへなかくもかなとおも
ひけるかな

物いひしめにこと人ものいふときゝておほかたにはあ
りとみれともいのはねはな^{*}そはかひはへるやまとい
ひたりければ

* なにそはかひはかへる山と九イ影イ。

さかしくもさるしくも九。

なにかは——なにしか九類影。なに、か乙。

たちとまるへき——たちとまるらん乙。

返——かへし九類影。ナシ乙。

(14) ナシ乙
こよひのみ——こひにのみ九類影。こよひのみ(よノ右ニひ歟トアリ)甲。

はかりに——はかり乙。

月の——つき乙。

あかきよれいものいふ——あかきにもいふ九類影。あかきよ乙。

あかきよれいの甲

* よれい九イ影イ

人のもとに——人のもとにて乙

※ 女九イ影イ

わすれても——かゝらても九イ影イ

此比の——このころの甲乙。このころは九類影

月よ——月よ、九乙類影。

おもはぬめ——おほえぬ人乙。おもはぬ女九類影。

つねに——ナシ九類影。つねに九イ影イ。

いひかけしかは——いひかくるに乙。

とまらぬ——つもらぬ九類影。とまらぬ九イ影イ
うちわたりて——うちわたりにて九類影甲乙。

(13) かへる山さかしくもみえなくに——2ウなにかは人の
たちとまるへき

返

(14) こよひのみまとへる人の心にはさかしくも見えぬな
らん

七月はかりに月のあかきよれいものいふ人のもとに

(15) わすれてもあるへき物よ此比の月よいたく人なすかせそ

ことゝもおもはぬめのつねにもいひかけしかは

(16) むめかへにゆきもとまらぬ春なれば——3オこのした露や
つねにつゆけき

うちわたりてかたらひし女たえてのちうらみければ

かたらひし——ものいひし九類彰。

女——女の九類彰乙

人の——人も九類彰乙

しのはしに——しのはらに九類彰甲乙

一夜は——ひと夜は彰。ひとよは九。ひとよの甲。

やとに——やとり九類彰甲乙。

衛門内侍のもとにこの少将と——右衛門督の命婦のもとに権中将と

九彰。

左衛門督の命婦の許に権中将と類。

この少将——よしたか乙。宮少将九イ。

みやの——三の宮の乙。

おはしたりと——おはしたるを乙。

いひやる——ナン乙。やる九類彰。

わかぬれ衣を——われまたきぬを九彰イ。我ぬれきぬを類彰。

かられて——とられて乙。かくれて九イ。

人にひさしくたえて——これもおなし人の給乙。同人にひさしくた

ひて(たノ右側ニこ賦トアリ)甲。

わするれと——わすれぬを九イ彰イ

わすられは——わすられす九類彰乙

例巻末ニアリ乙。

扇のゑに——あふきに九類彰乙。

かきたる——のかきたる甲乙。きつけたる九。のかれたる類彰九イ

所に——ところにかく甲。ところかきつく九。ところなとあるに

九イ。ところなとあるにかきつく類彰。

(17) あふさかやたひ行く人のし。はしはに一夜はやとにとらぬ物かは (ヤ)

(18) 衛門内侍のもとにこの少将となのりてみやおはした 命婦さちりときくといひやる
あやしくもわかぬれ衣をかきたるかなみかさの山を人にかられて

(19) 同人にひさしくたえて」3ウ
わするれとかくわするれとわすられはいかさまにしていかさまにせん

(20) 扇のゑに梅花かきたる所に
としことにとまらぬ花の色よりもかれたるのへをみるそかなしき

ところにて——のころ九類彰。所に九イ
さしくしを——さしくし九類彰乙。

とりたりし——とりたる九類彰乙。

心ひとつに——ころひとつを九類彰乙。心のうちに九イ彰イ
そらそなき——かひそなき九類彰。

いかなる人にかありけむ——ナシ九彰。いかなる人にか九イ彰イ。
かへしいかなる人類。

わけて——わきて九イ彰イ。分て類。

我をな——わかにな乙九イ。我にな彰。我おな彰イ。

かつ思ひつゝ——かつはいひつゝ九類彰乙。

衛門内侍——衛門藏人の九彰乙。左衛門藏人の類。

うとかり——うかり乙。

こうりにかけて——こうりにかきて九イ。こくれうのおかしきをつ

ゝみてそれにかきつく九類彰。

みはそのうりと——かはそのくれと九類彰。みそののくれと甲イ彰
イ。

しりなから——きゝなから九類。

つゆけき——くるしき九類彰。

さとなから——さしなから九類彰乙。

いゑありき——の中宮にて九類彰。の中宮にてありし乙。

(24) ナシ、(24)ノ詞書ニヒキツツキ(68)(69)(70)(71)アリ乙。

きゝし——いひし九イ彰イ

うちとけぬ——なみとけかたき九イ彰イ。

あたるなるなみ以下——とけはあたるなるなみもこそたて九類彰。とけ

(21) こせちのところにてさしくしをとりたりしかへすとて
人しれぬ心ひとつになけきつゝつけのをくしをさすそら
そなき

返いかなる人にかありけむ」4オ

(22) かきわけて我をなさしそうつくしとおもてくにかつ思
ひつゝ

衛門内侍なをうとかりければこうりにかけて

(23) ならされぬみはそのうりとしりなからよひあかつきとた
つそ露けき

とをさとなからものいひし女にほりかはにいゑありき

(24) おもふことなるとかきゝしかひもなくなとうちとけぬよ
はのしらなみ」4ウ

かへし

はあたる名のみなかたて甲。
はかりに——はかり九類影乙。

しのひたる人にあひて——ナシ九類影乙

むすひをきたる——むすひおきつる九類。ほのむすひてし乙

心も——ころの九類影乙

みえける——みえつる九類影乙

のくさかくれの——のくさかくれの乙

とけてや——とはてや甲

あきのすきんと——あきもすきむと九類。あきもすきんと影、あき

もはてむと乙。あきをはてむと九類影イ

すらん——すらむ乙。

うりのありしをやるとて——うりやるとて乙。うりのありしをとり

て九類影。

ことの——ことに乙。

なれは——なれと九類

ならず——ならむ九イ。ならん類イ影イ

たのみつる——おもひぬる九類影。たのまるゝ九イ類イ影イ。

たのみぬる甲。

つらにも——つらさも九類影。つらさも九イ

ならはさりけり——ならさゝりけり九類影乙。ならさりにけり九イ

さくなむさを——さくなむさうを九類影

みて——よみし九イ影イ

* 高光少将歌也甲イ

かへし——ナシ九類影乙。

(25) うちつけにおもひなるとのうらもなくあたるなみ^本な
そた^{そた}
てみて

八月はかりにしのひたる人にあひて人めをいたくしの
ひしかはよふかくかへるあしたにすゝきにつけて

(68) 花すゝきむすひをきたるたもとゆへ露も心もとけすみえ
ける

かへし

(69) ほのむすふのくさかくれの「5才花すゝきとけてやあき
のすきんとすらん

ものいひし人にうりのありしをやるとて

(70) たつことのものうかりつるうりなれはのちやならずとた
のみつるかな

かへし

(71) あたなりとなにたつきみはうりふ野のかゝるつらにもな
らはさりけり

よかはにてさくなむさをみて

(26)* むらさきのいろにはさくなむさ「5ウしのくさのゆか
りと人もこそみれ

里のには——さとのにも九類彰。

わひしさ——かなしさ九類彰。

はゝ上——はゝうへの類彰。

ひさしく——ひさしう九類彰乙。

まいり侍ら——まいらせ給は乙

たまはせたりし——たまはりたりし甲。たてまつりしはゝうへ九類

彰。たまへりし乙。

* 新古恵子女王九イ

みれとつゆたに——みれともつゆも九イ彰イ。

そのはなのすこしなゑたるに——ナシ九類彰乙

まさもと——まさとも乙。

あらさりしかは——あらさりしかはおかしきあふまにて乙。

「山おろし」「おりにかに」ノ二首詞書トモニナシ九類彰。

おりにかに——おいらかに乙。おひら（右傍ニ「本ニ本ノママ、左

傍ニ「ら歟」トアリ）かに甲。

たりな——たりや乙

大輔のきみに——大夫君人のめて九類彰。たいふの君乙。

のほりたりとて——のほりたりときゝて乙。

みちなるに——みちなれば九類彰乙。

いひいるゝ——いひたるおともふくなりける乙。いひいるゝおと

ともふくなりける九類彰。

おもはぬものか——おもひしものを九類彰。おもふものから乙

あはぬ——とはぬ九類彰。

かへし——返事九。返り事類彰。

かへし

(27) さくら花山にさくなむ里のにはまさるときくをみぬかわ

ひしさ

はゝ上東宮にさふらひたまひしにいとまひてひさしく

まいり侍らさりしかはなてしこにつけてたまはせたり

し

(72) よそへつゝみれとつゆたになくさますいかゝはすへきな

てしこの花」6才

御返そのはなのすこしなゑたるに

(73) しはしたにかけにかくれぬほとはなをうなたれぬへしな

てしこの花

ひらこも

まさもとの少将よさりこむとありしにさもあらさりし

かは

山おろしのかせはふけともことのはも今はちりこぬ谷の

埋木

かへし

本マ

おりにかにみねの松とはいはず」6ウしておもはせたり

な谷の埋木

ふくなるころ大輔のきみに人のくによりのほりたりと

てもへのゆくみちなるにいひいるゝ

(28) こひしとはおもはぬ物かふちころもきたりときけとあは

ぬ心よ

おとこあるほとにてかへしなし——ナシ乙

ほりかは——堀川彰

いみしうたかく——ナシ九類彰。いみしく九イいたく乙。

ほそどのに——ほそどの、九類彰。ほそどのにて乙。

さしてすたれより殿もりつ

かさして——ゆきふりかゝりたるをとのもつかさしてさしいれて九類彰。ゆきのふりかゝりたるすたれのしたよりさしいて乙。

少将の——弁の少将のきみ九類彰。先の少将九イ彰イ。

たてまつりたるとそある——たてまつれたまふとてそれにむすひつ

く九類彰。たてまつり給たり乙

「時すきて」ノ歌——まねくかたにそゆきとまりけるとかきておこ

せたりければときすきてかゝるすゝきのみなれとも九類彰。

とてとらせければ——かきておこせたり九類彰

せよとか——せむとか九類彰。

ゆきとまるらん——むすひぎきけん九類彰。 ゆきもとまらぬ九イ

彰イ

かきて——かきてかみにつゝみて九類彰乙。

とらせたる——とらせたれば九類彰乙。

かせも——風の九類彰。

しのすゝき——はなすゝき九類彰。

よらん——よらむ九甲。

かへし——また返し九類彰乙。

あはれとそ——あはれにも九類彰乙。

おもひなりぬる——おもふなるかな九類彰。おもひけるかな乙。

おとこあるほとにてかへしなし

ほりかはの中宮にてゆき」了才のいみしうたかくふり

たるつとめてれいけいてんのほそどのにゆきふりかゝ

りたるかれたるすゝきにさしてすたれより殿もりつか

さして入て少将のたてまつりたるとそある

時すきてかゝるすゝきの身なれともまねくかたにそゆき

とまりける

とてとらせければ」了ウ

又かはらげにかきてうちわりてとらせたる

まためなくかせもふくよはしのすゝきよらんかたなきも

のをこそおもへ

かへし

あはれとそおもひなりぬるしのすゝき秋こそうければる

(31) さららん

(32) のをこそおもへ

(33) さららん

(34) あはれとそおもひなりぬるしのすゝき秋こそうければる

(35) さららん

(36) あはれとそおもひなりぬるしのすゝき秋こそうければる

(37) さららん

(38) あはれとそおもひなりぬるしのすゝき秋こそうければる

(39) さららん

(40) あはれとそおもひなりぬるしのすゝき秋こそうければる

しのすゝき——はなすゝき九類彰。

はるは——はるも九類彰。

つらしや——しらしな九類彰。

一品宮の——一品宮乙。

所にて——所のまへにて九イ。

かうし——かむし九類彰。むかし乙。

ねかいしかは——ねかひしかは九類彰甲乙。手かひしかは類

かうしをゝりて——いとをかしくかうしをなら

して乙。

いたしたりしかはとりて——え、ふくろにさしいたしたりければこし

にひきつけて九類イ。よふくろにさしいたしたりければこしにひき

つけて類彰。さしいてたりしかはこしにひきつけて乙。

梅つほのかたに——つほのかたに乙。

まいりて——きむたちひきつれていきて九類彰。ナシ乙

こきいれて——いろ／＼にこきいれて九類彰。

かくかきていれたり——かうかきて内にいる乙。かうかきてなかに

いれたり九類彰

うれしやは——うれし(右傍ニ如本トアリ)乙

みつれば——みつれと九類彰。

なりたる——なれたる乙類九イ彰イ

心ちこそすれ——ころのみして九類彰。こゝちのみして乙。

返以下「いつとなく」ノ歌ナシ九類彰。

例「また(はか)なさは」ノ歌アリ九類彰。

例ナシ乙。

はつらしや

一品宮のたいはん所にてかうしねかいしかはやまふし
のはなに「8才かうしをゝりてならしていたしたりし
か。とりて梅つほのかたにまいりて花をこきいれてか
くかきていれたり

(34) うれしやはこれをみつればあぢきなくはなになりたる心
ちこそすれ

返

(35) ひとつとなくのとききはるの空なれば花におとらぬ身とも
なりなん

又かへし

はなは——はなも九類彰。

ありやは——ありやと甲。

又かへし——又かへしまろなるさうふにつけて九類彰イ

はるのはな——春ははな九類乙。春は花彰。

ちくやはさへに——ちくやはさへに甲。ちくやはちくさに九。

ちるやちくさに類彰。ちりやちくさに九イ

おもへとも——にほへとも九類彰イ。りくへとも九イ。

ふらのししう——藤侍従九類彰。ふちの侍従甲。ナシ乙。

さうふにつけて——さうふやるとて九類彰。

これたにも——たまたにも九類イ。こまたにも類彰乙九イ。

まく——いふ九類彰乙。

ふさひとか——すさひとそ九類彰。ふさいともと(傍ニ如本ト注アリ)乙。

草——たに九類彰乙

そふる——かへる九類イ。くつる乙。うつる類彰九イ。

なになる——なになり九類彰乙。

あらきぬ——かりきぬ甲乙。かりきぬのひも九類彰。

とりて——ときて乙。

むひめ——むすひめ九類彰甲乙。

ときておこせたりし——とりかへたりしかは九類彰。ときてかへし

たりしかは乙。

人にいまなと——人にはまれと九類彰。人にはまなと甲乙彰イ

うちとけにけん——うちとけぬらん九類彰乙

(41)(42)ノ順ニ配列九類彰乙

(36) 時ならぬ身にもいかたかなりぬらん—8ウはるにをくる

はなはありやは

又かへし

(37) はるのはなちくやはさへにおもへともことのはしけしか

くてやみなん

ふらのししう五月五日にまろなるさうふにつけて

藤侍従兼

(38) これたにもすさめすときくあやめ草かゝるはきみかふさ

ひとかきく

かへし

(39) あやめ草かゝるは人にひかれけりみきはにそふるきみや

なになる「9才

あらきぬをとりてむひめをときておこせたりし

(40) われならぬ人にいまなとむすひをきしひもいつのまにう

ちとけにけん

いし山のみねのもみちを

いし山のみねのみちを——ナシ乙。いし山のみねのみち九類彰。

* 山上曉月九イ彰イ

月は——月の九類彰。

そら——はら類彰。

にて——にての乙。

山のはに——山のはの九。山端の類彰。

人のいりにけるかな——そらにしりにけるかな九類。

むすひおく——むすひおかぬ乙。

色を——身を乙。いろは九類彰。

とひぬ——とけぬ九類彰甲乙。

しもをと——しもかと九類彰。しもとも乙。

なかく——なりて九イ類彰。

よは——よに九類彰。よの甲。には乙。

をふね——うふね九類

さは——さを乙類彰

* 「本ニコレモカ、テトアリ」甲イ。

「よをさむみ」ノ歌ナシ類彰。

さむみ——ふかみ。

なく／＼しくる——つく／＼きある九。なかくなきづる乙。

かなしな——かなしも乙。

時めきし——ときめいし九類彰。

をこせたりし——おこせたる乙。

時めく——ときめく九類彰。

き／＼しかは——き／＼しかと乙。

(42) 有明^{*}の月はそらにて山のはにふかくも人のいりにけるか

な

九月九日菊のつゆをみて

(41) うつろはぬまくにむすひをく露の色をとひぬしもをと^{本ケ敷}な^{とかい}か

かくみゆらん

(43) ゆくかたもさためなきよはみつはやみ」9ウをふねをさ

ほのさすやいつこそ

^{本ニ}よをさむみ^{(虫腹)*}たつかはきりも有ものをなかく／＼しくるちと
りかなしな

衛門のないし時めきしころ山にのほりていひをこせたりし

(44) 空たかく時めく月とき／＼しかは茂もくもゐにきてそなか

ないしに——ないしの九。内侍のすたれのまへに類彰。
ものいふころ——ものいふほとに九類彰。ものいふに乙。

*あかつきかたに九イ

ふりければ——ふりかゝれば女のつけゝれば九類彰。ふりかゝれば乙。

かはつくれとも——かほにもてなすを九イ類イ彰イ。
たもとに——たもとの乙。

雨そわひしき——あめのわひしき九。あめのわひしき類彰。あめのわりなき九イ彰イ。

ないしところ——またおなしどころ九類彰乙。

たちよりて人のありしかは——たちよりたるにまらうとのありしかはたちなからかへりてまたあしたに九類彰。たちよりたるにまらうとのありしかはいまかへりなんしはしといひいたしたりけるかともにもかへらさりければ九イ彰イ。たちよりたるに人のありしかは乙。

うりにかきて——ナシ乙。うりにかきつく九。うりにかくつく類彰。

こそはこれ——これをみよ九類彰。これはこれ乙。

ひとよはひとよ——ひとよはひとよ九類彰。ひとよひとよは乙。ひ「とよひと」めに九イ。

つらなから——つらかりき九類彰。はかられて九イ彰イ。

たちやすらひし——たちわつらひし九類彰。

やはあらぬ——やあるらん乙九イ彰イ

(46)ト(48)ノ間ニ(47)「たちわひて」ノ歌アリ類九彰。

むる

ほりかはの中宮のないしにもいふころ*あめのふりければ

(45)わひぬれはつれなしかほはつくれともたもとにかゝる雨

そわひしき」10才

おはしころに或ないしところにたちよりて人のありしかはうりにかきて

(46)こそはこれひとよはひとよつらなからたちやすらひしうりにやはあらぬ

中宮の大夫のうふやの七夜むかしをこひたまひて

大夫の——大夫九類彰乙。

むかしを——ふかしを九。

ちゝにつけ——ちるにつけ九類イ。

のとけかれ——のとかなる九類彰。

とそ——とも九類彰乙。

君は——きみそ九類彰乙。

いはまし——いふへき九類彰。

(49) 下(50)ノ間ニ(49)「きみかゝく」ノ歌アリ類九類彰乙。

ふちのしゝう——藤侍従九類彰。

たちよりたるに——すげにものいひたるに月もなきころなれはいと

くらしやなといひたるに九類彰。

やみのうつゝはと——やみのうつゝはさやかなると九類彰。

いへは——いひたるに九類彰。

ふちのしゝう……いひたるに——やみのうつゝをいふに乙。

みつるよは——みるよりも九類彰乙。

うつゝは——うつゝそ九類彰。心は乙。

(50)「おもひつゝ」ハ(49)「これのみよ」ノ次ニ出ツ乙。

はかなかりけり——はかなかりける九類彰。

はかりしに——もとに類九。許に彰。

はかなくも——はかなくも九類甲乙

あらは世に——よにあれば乙。

おもひつきにしことはわすれし——あらはとおもふきみにやはあら

ぬ九類彰。おもひつきせぬよにやはあらぬ乙。おもひつきにしこと

はわすれし彰イ。

(48) ちゝにつけおもひそいつるむかしをはのとけかれとそ君
はいはまし

(50) おもひつゝまどろむほとのみつるよは「10ウかゝるうつゝ」
ははかなかりけり
ふちのしゝうたちよりたるにやみのうつゝはといへは
たるにやかなりといひたるは

(51) 女のはかりしに
命たにはかなくもあらは世におもひつきにしことはわす
れし

又女に——また女九類彰。

つらぬ——つらき九類彰甲乙。

たゝならぬ——やすからぬ乙類。やますもある九イ彰イ

* 七月十四日九イ彰イ

すり——修理九類彰。

これたゝ——これたゝわかなすひわかうりををこせたりらい月九類

彰。

少将を——少将九類彰乙。

きゝて——きゝてのころ九類彰。きゝしころ乙。

みすのもり——みすのもり九類彰。御園守類。

54ノ詞書ニヒキツヰキテ57ノ歌詞アリ乙。

54ト57トノ間ニ55「なにことも」56「あやもあれ」ノ二首アリ類九

彰

郭公——ほとゝきす九乙。時鳥類彰。

こゑす——こゑす九類乙。声せす彰。

のちになく——のちのなつ九イ彰イ

よに——よを九類彰。

女たつねしに——また女をたつねしに九類彰乙。秋のはしめにをみ

なへしにつけて女に九イ彰イ

つみふかき——つみふかき九類イ彰イ

ものにさりける——ものにそありける九類彰乙。ものところ、みれ

九イ彰イ。

たつぬる人——たゝなる九イ彰イ。

あらせす——あらせよ九類彰。あらせぬ乙。あはせぬ、九イ類イ

又女に

(52) いつまでの命もしらぬ世中につらぬなけきのたゝならぬ

かな

かへし

(53) 身をつみてなからぬよをしる人はひとへに人をうらみ

さらなん

すりのかみこれたゝさねすけの」11才少将をむこにと

るへしときゝて

(54) みすのもりこたへたにせよ月たゝはかのこともみなゝり

ぬへしとか

五月五日郭公のこゑすとて

(57) こよひしもきかてやゝまん郭公のちになくともさためな

きよに

女たつねしに

つみふかきもの

(58) つみふかきものにさりける女郎花たつぬる人をたゝにあ

らせす

あらせす

女御殿——女御殿の九類彰

すのこにほそちをなかひつにいれて——ほそち乙。すのこになかひつにはそちをいれて九類彰。

たまへるを——給しに乙。

すれはみかうしおろしたる——ナシ乙。

うせたれは——うせにしかは乙。

かくす——をさむ九類彰。おさむ乙。

「石山にまうて」以下「みやの御かへし」マデナシ乙。

まうてたるに——まうてゝかへる九類彰。

とりのおほう——とりおほく九類彰。

* 此歌さきにあるに相似たり九イ

有物を——あるものを九類彰甲

かへる——きぬる九。きぬる類彰。

* とのゝ御き日にもゝそのゝ御たうにつこもりの日よるより愈
仏せらるつゐたちの日のあかつきかたに導師からもいとかなしかり
けりそのほとにあの女房さえすみしてかきつけて女御の御前におき
たりけるかくなんこに居給へるかへしとてなみたにもものうたあり

九イ

うせたまひてのち——うせたまひて彰。

はかう——八講九彰。

したまひに——したまひしつゐてに九類彰。

なみたにそ——きみたにも九類彰。なみたにも九イ彰イ。なみたか

は九イ彰イ

女御殿すのこにほそちを「11ウなかひつにいれておかせたまへるをゆふたちのすれはみかうしおろしたるまきれにうせたれは

(59)ぬす人はほそちをみても雨ふれはほしうりとてやとりかくすらん

石山にまうてたるにかはつらにとりのおほうたては

(60)さよふかくたつかはきりも有物をなくくかへるちとりかなしな

* 殿うせたまひてのちはかうしたまひに「12才

(61)なみたにそおなしみとりの雨ふれはこゝろをもかへたつねつるかな ※

みとりの雨ふれはこゝろをかへぬれとてのりのあめのふるこゝろをも九類彰。

※ イ本にのりの雨を本歌にて涙にもは答也九イ

みやの御——されは九類彰。

なみたも——なみたに九類彰。

きえて——はてや九類彰。はては乙彰イ。

ひまなかるらん——いとゝなからん九類彰。

⑧ハ重出。類九彰乙ナン。

権中納言の御ともにはるの花みに——権大納言殿にはなみに九類彰。権大納言の御もとにはる花みに乙。

いきたりしに——いきたりしかは九類彰。まうてたりしに乙。

ちりしかは——はなちりたりけるをみて大納言九類彰。散たりしかは大納言乙。

まちつ——まちし乙。

殿かく花みたまて——殿かう花みたまひて九イへたうひの別当はなれは九類彰。殿へたうはなれは乙。

いまた——またに九類彰。

こゝろやすく——こゝろやすくて乙。

のこり——仁和寺九類彰。には乙。

花みん——花もみん乙。

とまる——とまる乙。あめのみりとまる九イ彰イ。

ふきみたらぬ物ならば——ふきみたれぬるはなれは九類彰。ふきみたれぬる春なれは類。

はなも——はなは乙。

みやの御かへし

(62) のりの雨もなみたもわかす神無月きえてしくれやひまなかるらん

さくなむきをかくして

(27) さくらはな わにさくなむさとりのはまさるときくをみぬかわひし

(63) 権中納言の御ともにはるの花みにいきたりしにさくらのちりしかは「12ウ

さくらはなまたみぬほとに散にけりのちの春たに心あらなむ

御かへし

(64) 此春の君をはまちつさくらはな風のこゝろのなきにや有らん

おなし殿かく花みたまていまた心やすくのこりの花みんとさためたまへる日風のいたくふきてとまるよしのたまへるに

(65) あまつかせふきみたらぬ物ならば「13オこゝろのとかに花もみてまし

みてまし——みるまし九類彰。みましや九イ

御返——御返し九。御返しに類。

へうたう——へたう九類彰。

たまへるを——たまひぬるよしを九類彰。

いと——ナシ九類彰

あはれかりて——あはれかり九類彰。

きこえたまで——きこえたまひて九類。

へうたう……きこえたまで——ナシ乙。

ふきとむる——ふきとめぬ九類彰乙。

はるのよの——はなの色の乙。

色のつねなきことをおもへは——つねなきことをしるとおもへは乙

九イ類イ彰イ甲イ

殿の——殿九類彰。

うせたまひてのはる——うせ給てまたのとしの春九類彰

いたうふれはその日——ふるひ九類彰。いたくふるに乙。いたうふ

るひ右衛門督にたてまつる九イ

はるさめの——はるさめも九類彰

時にたかふ——としにしたかふ九類彰乙

ふるそと——ふるよと九類彰。

かなしき——かなしな九類。

(68) (69) (70) (71) (72) (73)ノ六首(67)ト(74)ノ間ニアリ九類。

(68) (69) (70) (71)ノ四首(68)ノ次ニアリ底本、甲。

(68) (69) (70) (71)ノ四首(68)ノ次ニアリ乙。

御返へうたうはなれたまへるをいといたうあはれかり

てきこえたまで

(66) ふきとむる風そかなしきはるのよの色のつねなきことを

おもへは

つねなきことをしるとおもへは

殿のうせたまひてのはる雨のいたうふれはその日

(67) はるさめの時に 本々 たかふよのなかにいまはふるそとおも

ふかなしき

これはのちにきくたるを人の「13ウかきつけたる

(73) 八御ノ次ニアリ底本甲乙。

きゝたるを人のかきつけたる——かきそへたまへるとそ九類。かきそひたまへるとそ影。きゝけるをかきつけたる乙。

かさ——もかさ九類影。

やみたまひて——やみて乙。

心ちするを——おり乙。心ちのするかなしぬるか九類影。

さりとも——さなりとも九類影。

しはしとかくなせさせたまひそと——しはしはとかくなせよ九類影。しはしはしとかくなせさせたまひそと甲。

経よまむ——誦経してん九類影。経すこしすんしはてん乙。経すこしよみてん九類影。

の心侍と——心はへの類影。

女御とのに——女御のおまへに九類影。

きこえたまひ——きこえおきたまひ乙。

おほくわすれ——おほしわすれ甲。わすれ九類影。

おさめ——をさめ九類影。

たまひければ——たまひてければ九類影。

うへ——はうへ九類影乙。はうへ甲。

かへる——わする九類影乙。

ち、君——六君九類影。七の君乙。六条宮のきみ九類影イ。

ゆめに——御ゆめにこのきみの御ふみありけるに九類影。御ゆめに

かのきみの御ふみにてあるに乙。

なくなりたまひて後七月——うせ給ての十月九類影。

清因そうつ——せいえむそうつ九。せいみむそうつ類影。せいそ

かさやみたまひてしぬへき心ちするをさりともしはし

とかくなせさせたまひそと経よまむの心侍と女御との

にきこえたまひけるをおほくわすれたまひてとくおさ

めたてまつりたまひければうへの御ゆめに

(74) しかはかりちきりしものをわたり河かへるほとにはか

へるへしやは

又のとしのあきちゝきみの「14才ゆめに

(75) きてなれし衣のそてもかはおかぬにわかれしあきになり

けるかな

なくなりたまひて後七月許に清因そうつゆめにちゝ

つ乙。かえいあさり九イ彰イ
ゆめに——御ゆめに乙。

おはする——をはする九類彰。

へたて、——へたて、あにきみとおはするに九類彰。

ものおもへるさま——ものをもしけ九類彰ものめつるさま乙。

おはし此君は心ちよけにて——ナシ九類彰。

さう——しやう九類彰。

ふきたまふと——ふき給を九類。

なるなりけり——なるなめり乙。

なとか——なと九類彰乙。

あにきみよりも——いみしう乙。

こひたまふに——こひきこえ給を九類彰。

御心ちよけなり——御心ちよけにてはおはする九類彰。

きこゆるを——きこゆれば九類彰。きこゆるは乙。

あはすと——いとあはず九類彰。いとあはれいふと乙。

おほしたる御けしきにて——おほして乙。おほしたるけしきにて九類彰。

かくのたまふ——たつそてをひきとめてかくの給九類彰。たつそてをひきとめてかくいへる乙。

※ 義孝。

花そちくさに——ちくさのはなそ九類彰。

ふるさとに——ふるさとの九類彰。

花つみあつめて——ナシ乙九類彰。

77ノ前ニ次ノ聯句アリ九類彰。

(76) 後
おとのおはするところにものをへたて、あにの少将
はものおもへるさまにておはし此君は心ちよけにてさ
うのふえをふきたまふとみればた、御くちのなるなり
けりなとかは、うへのあにきみ」14ウよりもこひたま
ふに御心ちよけなりときこゆるをあはずとおほしたる
御けしきにてかくのたまふ ※
らしくれとは花そちくさにちりまかふなにふるさとに袖ぬ
らすらん

花つみあつめて

(77) 心にもあらてあひみぬとし月をけふまで花とつみてける
かな

むかしは契りき蓬萊宮の中の月

いまはあそふ極楽界のうちの風に。

けふまで——けふまで類影

けるかな——ける哉影

みすそあらまし——みえすあらまし九。みえすそあらまし類影。

昔契以下二行ナシ九類影乙

卷末(4)「わするれと」ノ歌アリ乙。

かへし

(78) うつろはぬ心なりせはとし月を」15才花とつみてもみす

そあらまし

昔契蓬萊宮裏月

今遊極楽界中風

藤原義孝 謙徳公男

正安元年十一月十二日

於西山往生院草庵

書写了

(花押)

「16才

正安本になく、それ以外の諸本に見える和歌。

(底本は九大本に拠る)。

また返し

(35) またなさはまことのはなにおとらめとあやしやはるのと

きならぬみよ

×

×

返し

(47) たちわひてはひかへりけるうりかつらならしかほはにや人

のみてけむ

人しれぬ——いのりする乙。

うちに——うちて類彰。

心あるかな——心あるかは乙。い、の、り、す、る、か、な、九、い

あやしき——あやしき彰
よのなか——世中彰

和歌配列順一覽 (数字は各本における和歌の配列序数を示す)

和歌	つらからは	あちきなや	かたるとも	秋はなを	つゆくたる	ゆふくれの	いまはとて	はねならふ
類(彰)	1	2	3	4	5	6	7	8
九	1	2	3	4	5	6	7	8
正	1	2	3	4	5	6	7	8
乙	1	2	3	4	5	6	7	8

和歌	夢ならて	春かせの	はる／＼の	きみかため	かへるやま	こひにのみ	わすれても	むめかえに
類(彰)	9	10	11	12	13	14	15	16
九	9	10	11	12	13	14	15	16
正	9	10	11	12	13	14	15	16
乙	9	10	11	12	13	14	15	16

和歌	あふさかや	あやしくも	わするれと	としことに	人しれぬ	かきわけて	ならされぬ	おもふこと
類(彰)	17	18	19	20	21	22	23	24
九	17	18	19	20	21	22	23	24
正	17	18	19	20	21	22	23	24
乙	17	18	19	20	21	22	23	24

和歌	あふさかや	あやしくも	わするれと	としことに	人しれぬ	かきわけて	ならされぬ	おもふこと
類(彰)	17	18	19	20	21	22	23	24
九	17	18	19	20	21	22	23	24
正	17	18	19	20	21	22	23	24
乙	17	18	19	20	21	22	23	24

- (49) きみかゝくいふにつけても人しれぬこゝろのうち心あるかな × 御返し ×
- (55) なにこともなるともなしにうりつらの名にのみたゝむことのあやしき × 四日よかへしあり ×
- (56) あやもあれあやもなくまれかのうりのかすならぬみよう × またかへし ×
- やはよのなか

うちつけに	むらさきの	さくらのはな	やまにさくなん	こひしとは	まねくかたにそ	ときすきて	さためなくかせ	もこそふけ	さためなくかせ	のふくよは	あはれにも	うれしやは	また(はか)なきは	ときならぬ	春ははな	こまたにも	あやめたに	われならぬ	うつろはぬ	ありあけの	ゆくかたも	そらたかく	わひぬれは	これのみよ
25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49
25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49
ナシ	26	27	31	36	37	38	39	40	41	43	ナシ	37	40	44	45	47	48	49	50	52	53	54	55	ナシ

たちわひて	ちるにつけ	きみかかく	おもひつゝ	いのちたに	いつまての	みをつみて	みそのもり	なにことも	あやもあれ	こよひしも	つゆふかき	ぬす人ば	さよふかく	きみたにも	のりのあめ	まくらはな	またみぬほとに	このはるも	あまつかせ	ふきとめぬ	はるさめも	はなすゝき	
47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	
47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	
ナシ	55	56	57	58	59	60	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	61	62	63	64	65	66	68	69	70	71	72	26	
ナシ	51	52	53	54	55	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	56	57	58	ナシ	ナシ	59	60	61	62	63	64	65	66	67

ほのむすふ	たつことの	あたなりと	よそへつつ	しはしたに	しかはかり	きてなれし	しくれとは	ころにも	うつろはぬ	山おろしの	おいらかに	いつとなく	よをさむみ
69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	ナシ	ナシ	ナシ
69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	ナシ	ナシ	ナシ
27	28	29	32	33	33	74	75	76	77	77	ナシ	42	51
23	24	25	28	28	29	65	67	66	66	30	31	38	ナシ

〔附記〕本稿執筆については、書陵部の橋本不美男氏に一方ならぬ御尽力を賜わり、又、九州大学竹内理三教授にも種々御教示を得ることができた。記してあつく御礼申し上げたい。